修士研究の記録

これは私が藤田教員の指導のもと、修士研究をした記録である。

2024年5月8日 稲福勇也

追記

なお月毎にwordファイルを分けて管理する。これは6月分の記録である。

2024年6月1日 稲福勇也

2024年5月までのまとめ

曲線座標系を用いたメッシュ生成を行いFEMの精度を上げることを提案する。特に、まずは一般的なFEMを行い、その結果に従って、離散化した座標変換を用いた新たなメッシュを作成し、曲線座標系上で解析対象を離散化し、再度FEMを行う。その結果として、同等の自由度を保ちながらも誤差が小さくなることを狙う。今後の課題は、曲線座標系上のベクトル値の積分をすること。

キーワード：曲線座標系、クリストフェルの記号、Adaptive Mesh、計量テンソル

6月4日Sat.

藤田先生とミーティング。

前回までの内容で、週右側していたのはよかった。

曲がってる境界について、曲がった境界条件が与えられた場合、境界上のメッシュをそわせないと誤差が生ずる。なおこれまで用いた座標系はどれも境界上で曲がらないからもんだなかった。

次は2次元ベクターに関する数値解を考える。特に2D弾性体の場合をシミュレーションする。

6月5日Tue.

参考：Jacob Fish and Ted Belytschko, “A first course in Finite Elements” (<http://160592857366.free.fr/joe/ebooks/Mechanical%20Engineering%20Books%20Collection/FINITE%20ELEMENT%20ANALYSIS/A%20first%20corse%20in%20finite%20element%20analysis.pdf>)

少なくともデカルト座標の場合は以下の通りに弱定式化される。

ロゴ, 会社名

自動的に生成された説明

ダイアグラム

自動的に生成された説明ダイアグラム

自動的に生成された説明

ダイアグラム

自動的に生成された説明ダイアグラム

自動的に生成された説明

テキスト

自動的に生成された説明

テキスト

自動的に生成された説明

ダイアグラム, 概略図

自動的に生成された説明

6月7日Fri.

上記の方針を撤回して、改めて以下の通りに弱定式化した。

6月9日Sun.

恒等変換の座標変換の場合において正しく作用することを確認。

タイムライン

自動的に生成された説明

ところで、解析解と一致しているかはわからない。

6月11日Tue.

藤田先生とミーティング

次回までの方針：2次元自重問題を解く。その際、メッシュは鉛直方向に3乗に比例する座標系を取る。そうすることで主応力が要素面について垂直であるように取る（アイデアの根源）。X境界ではスライド境界を設ける。Y=0ではディリクレ境界（固定）。図示はとりあえず節点のみ（形状関数は歪むだろうが今は気にしないでおく）。この例ではst座標も直交座標系となるため、クリストッフェル記号は非ゼロ要素が一つしかないが、とりあえずはこれで検証する。

6月12日Wed.

X軸方向に1m x 1mの領域で自重問題を解く。X=0,1におけるy成分はイコールでつなげた（周期的）。結果は以下の通り。なお、解析解に十分に一致。

パソコンの画面

中程度の精度で自動的に生成された説明

6月14日Fri.

解析解と数値解が一致しないので、数理背景を整理し直した。コード中の記述を整え直した。

6月17日 Mon.

引き続き一致しないので、定式化を整理し直した。しかしなお一致しない。

6月18日Tue.

藤田先生とミーティング。

定式化の整理と数値解と解析解の不一致について報告。ここで、数値解の基底がxy基底でない(実際にはst基底)ことに留意し、表示方法を整理し直すことで（解のスケーリング）解決。数値解が正しく、適切な基底を用いることで一致することを確認した。なお、スケーリングの際に、st基底の長さをかけるので、基底の長さ、すなわちx(s,t)またはy(s,t)の微分が領域内で0あるいは不定値となるような座標変換は用いないことに留意する。

今後の方針は、1.要素数とErrorの関係を整理すること。2.その際異なる座標変換を用いること。3.座標変換間で比較可能とできるように、メッシュはxy座標系上で定義すること。

その後、gitリポジトリを作成し、定式化をREADME.md上で行った。

6月19日